

〈研究ノート〉

(新資料) 田村(佐藤)俊子と中国婦女慈愼学会の
座談会 (1942年3月18日) について

朱 彩 雲

はじめに

本稿は田村(佐藤)俊子が1942年3月18日に参加した中国婦女慈愼学会の座談会に関する中国語の資料2点の紹介である。

1つ目は短い新聞報道である。2つ目は中国婦女慈愼学会の会誌『慈愼婦女』に掲載された、李蘊冰による議事録であり、そこには、この座談会における俊子の発言が記されている。この2点の資料は以下の表1の通りである。

表1：田村俊子と中国婦女慈愼学会の座談会に関する資料

NO.	作者	タイトル	掲載先と時期
①		「婦女慈愼学会 昨開座談会 歡迎日女作家佐藤俊子」(日訳：婦女慈愼学会 昨日座談会を開催 日本の女性作家佐藤俊子を歓迎)	『中報』1942年3月19日第3版
②	李蘊冰	「本会舉行大東亜解放婦女座談会書感 ^(ママ) 」(日訳：本会が行った大東亜解放女性座談会の書感 ^(ママ) [所感の間違いか])	『慈愼婦女』第3巻第2期、1942年3月25日、3～8頁

管見の限り、先行研究では、俊子が約3年間の北京滞在を終えて南京に着いた1942年2月初めから、上海で中国語による婦人雑誌『女聲』を創刊した同年5月15日までの時期について、簡単な記述しかない⁽¹⁾。

(1) 一番詳しい記載は、長谷川啓/黒澤亜里子 [編] 瀬戸内寂聴・小田切秀雄・草野心平 [監修] 『田村俊子作品集 第三巻』(オリジン出版センター、1988年)の年譜である。その記述は以下の通りである。

「二月、南京へ赴く。草野心平に逢い、同氏の斡旋で南京日本大使館報道部から中支における生活保証を得る。さらに、同氏が顧問として参与していた太平出版印刷公司の名取洋之助を紹介され、上海の同出版局(上海香港路一一七号)から華文婦人雑誌発行の計画がまとまる。発刊準備のため、上海に赴く。はじめビヤス・アパートに、ついでに北京大樓の四階一七号室に移る。日本大使館囑託となり、取材および資材の確保その他、軍部の援助のもとに、五月十五日、月刊婦人雑誌『女聲』を創刊(462頁)。

今回の資料①②によって、俊子が1942年3月18日に南京で中国婦女慈愼学会の座談会に参加したという事実をはじめて証明できた。特に資料②は、この座談会での俊子の発言内容(4回分)を記載している貴重なものである。また、これらの資料により、これまで明らかにされていない俊子のこの時期の行動や人的ネットワークについての情報も確認できた。

本稿は第一節と第二節において、それぞれ資料①と②についての内容を紹介しながら検討する。付録では、俊子と中国婦女慈愼学会の座談会についての出席者・関係者を整理する。資料①と②の翻刻・日訳は、紙幅の都合で、次回以降にゆずる。(なお、文中の日本語訳は筆者による。下線は引用者。)

一、中国の新聞記事「婦女慈愼学会 昨開座談会 歓迎日女作家佐藤俊子」

この記事の要点を下記の表2のようにまとめた。

表2：記事「婦女慈愼学会 昨開座談会 歓迎日女作家佐藤俊子」の要点

佐藤俊子	「日本の女性作家」であり、「北平から上海へ行き、南京を經由」している。
「中国婦女慈愼学会」	俊子を「歓迎する為に、18日午後4時、中日文化協会の力を借りて大東亜解放婦女□(座)談会を行った」。
出席メンバー	「当該会全体理監事及び女性作家約20人あまり」である。
当日のスケジュール	「当該会の理事長萬孟婉女士主席」の歓迎挨拶、俊子の答詞、座談会、宴会という順番で、「夜9時まで続いた」。
内容	「雑誌の創刊を決定した。知識を交換することで、中日両国女性運動の展開を図った」ということである。

(1) 俊子の1942年の南京滞在時期と行動(『女聲』が創刊される前)

新聞記事が掲載されたのは1942年3月19日である。タイトルに「昨日座談会を開催」、本文には「18日午後4時、中日文化協会を借りて大東亜解放婦女□(座)談会を行った」とあるので、俊子と中国婦女慈愼学会との座談会は3月18日だとわかる。

さらに、俊子が3年間滞在了北京を離れて1942年2月初めに南京に着き、同年5月15日に上海で雑誌『女聲』を創刊したので、座談会が行われた時点では、確かに俊子は「北平から上海へ行き、南京を經由」していると言える。

また、後述する資料②では、「今回の座談会について、本会の司会者のもとと4月に行う予定でしたが、その後佐藤女士は南京においでになり、19日

の朝に上海へ行くことになりました。そこで、前倒して開催するようになり、佐藤女士に参加していただき、歓迎の意を表します」という内容がある。

つまり、俊子は北京を離れて1942年2月初めに南京に着き、同年3月18日まで南京に滞在した。3月18日は中国婦女慈愼学会との座談会を行い、19日に上海へ赴き、同年5月15日に上海で雑誌『女聲』を創刊したということがわかった。そして、雑誌『女聲』が創刊されるまでの1942年の俊子の南京滞在時期は、1942年2月初めから同年3月18日までの約1ヶ月半であることが確認できた。

(2) 南京滞在時期(1942年2月初め～3月18日)における俊子の人的ネットワーク

1942年3月18日の座談会は「中国婦女慈愼学会」が俊子を「歓迎する為に」「中日文化協会の力を借りて」主催したものである。

この「中国婦女慈愼学会」とは、日偽当局は南京が汪偽政権の「首都」だという事を利用し、成立した全国文化學術社団の一つであり、その総部は南京に設置されている⁽²⁾。「中日文化協会」とは、1940年7月28日に南京で成立した、「国民政府主席代理汪精衛と中華民国派遣特命全權大使阿部真行」をはじめ、「大東亜新秩序一日提携、善隣友好、共同防共の三原則を基調として」日本大使館や興亜院の要人といった「日本政府の強い後ろ盾を背景とした機関」である⁽³⁾。俊子はこの2つの組織とつながっていたのである。

座談会の出席メンバーは「当該会全体理監事及び女性作家約20人あまり」と記載されている。では、中国婦女慈愼学会の理監事人員構成はどのようなものなのか。

1940年12月に中国婦女慈愼学会が汪偽行政院に隷属する社会運動指導委員会へ提出した書類には「中国婦女慈愼学会理監事略歴表」が載せられてい

(2) 経盛鴻『南京淪陥八年史(下冊)』社会科学文献出版社、2005年、806～808頁。

1940年3月に汪精衛が南京で日本に協力する政権を樹立した。現代の中国ではそれを日本の傀儡政権と見て、「偽」の字をつけて「汪偽政権」と表記するのである。

「日偽」については、日中戦争期、日本帝国主義が中国で設置した行政組織や機関などは、中国では総合的に「日偽」と表記されるのが一般的である。

本稿の「汪偽」、「日偽」という言葉は中国での表記方式により、「」を付けていない。

(3) 杉野元子「南京中日文化協会と張資平」『藝文研究』第87巻(岡崎夫教授退任記念論文集)2004年12月、257～258頁

る⁽⁴⁾。それによると、中国婦女慈僉学会の理監事は合計20人で、その中で理事は13人（喻毓秀、萬孟婉、譚其覚、蔣果儒、齊家、鈕愉、田昭、王竹虚、周端伯、岳継先、王琳卿、董乃貞）、監事は7人（王英、瀋錦、花貞彬、戴肖梅、蔣秀琴、李国琳、劉淑度）である⁽⁵⁾。

また、後述する資料②によると、座談会「その日の出席者は佐藤女士、本会の全体理監事萬孟婉、李蘊冰、譚其覚、劉叔度、王英、また女性運動の先輩である嚴清穆女士、女性作家名流如何心女士、蔣果行女士、顔潔女士、金問蘭女士、そして宣伝部の楊司長劉司長及び教育部邵鳴九主任の出席」があった。

新聞記事に書かれている「当該会の理事長萬孟婉女士主席」の「萬孟婉」について、「中国婦女慈僉学会理監事略歴表」では、「年齢:33。本籍:雲南。履歴:日本早稲田文学部大学院卒業、宣伝部編集審議」⁽⁶⁾と記載されている。ほかの文献によると、萬孟婉は南京模範女子中学校の校長で、汪偽政権宣伝部の宣伝事業司司長・秘書室主任をつとめる楊鴻烈の妻であり⁽⁷⁾、早年に早稲田大学に入学し、1941年には国立師範学校の校長であった⁽⁸⁾。これによって、「宣伝部の楊司長劉司長」の「楊司長」は萬孟婉の夫・楊鴻烈を指すことが判断できる。また、資料②における議事録の発言者に「劉石克司長」が出ているので、「劉司長」は劉石克を指すことがわかる。

では、俊子がどのように萬孟婉や中国婦女慈僉学会と接点を持ったのか。資料②のなかで、俊子は以下のような発言を行っている。

中国に渡った個人的な目的は、上海で女性のための刊行物を創刊するためです。(略)しかし、私は中国の女性を深く知っていないので、機会を採って貴国の女性を訪ねたいと考えていました。この前、宣伝部の郭次長のご紹介を承り、萬校長にお目にかかりました。萬校長はとても誠意を込め

(4) 中華全国婦女連合会婦女研究所/中国第二歴史档案館編「中国婦女慈僉学会検送該会修正章程等件備案与汪偽社会運動指導委員会来往文書」(1940年12月4日-13日)『中国婦女運動歴史資料 民国政府卷1912~1949 下』北京:中国婦女出版社、2011年、1000~1006頁

(5) 同前書、1005頁

(6) 同前、1005頁

(7) 中国人民政治協商会議全国委員会文史資料委員会『文史資料選輯』編輯部編『文史資料選輯 合訂本 第34巻 第99~100輯』中国文史出版社、2000年、144頁

(8) 王奇生『中国留学生的歴史軌跡:1872-1949』湖北教育出版社、1992年、128頁

て貴国の南京在住の有名な女性と女性作家を紹介していただきまして、会
見ができました。(3~4頁)

ここでの「萬校長」は萬孟婉であり、「宣伝部の郭次長」は郭秀峰⁽⁹⁾である。
つまり、上海で女性のための刊行物を創刊する為に、中国の女性を訪ねること
で中国女性を深く知りたいと考えていた俊子が、汪偽政権の宣伝部次長である
郭秀峰の紹介により、萬孟婉との接点を持つようになったのである。

また、この新聞記事の掲載先『中報』⁽¹⁰⁾も汪偽政権の新聞である。

以上見てきたように、俊子は汪偽政権とつながり、その協力によって萬孟婉
をはじめとする汪偽政権の女性団体組織「中国婦女慈愼学会」と接点を持つよ
うになった。つまり、汪偽政権、特に汪偽政権の女性団体「中国婦女慈愼学会」
はこの時期の俊子の人的ネットワークを考察するうえで見落とすことができな
い団体なのである。

(3) 「雑誌の創刊」について

「中日文化協会の力を借りて」行ったこの座談会の内容について、資料①で
は「雑誌の創刊を決定した。知識を交換することで、中日両国女性運動の展開
を図った」と記載されている。そして、資料②における俊子の発言にも「中国
に渡った個人的な目的は、上海で女性のための刊行物を創刊するためです。刊
行物の内容も他の女性のための刊行物と同じです。従って、東亜の女性の知識
と福利を増やすことを図ります」とある。

この「雑誌の創刊」は約2カ月後の1942年5月15日に俊子が上海で創刊した『女
聲』のことだと考えられる。資料②における俊子の「私が南京に来る目的は、4、
5月の間に女性雑誌を出版したいためです」という発言からも裏付けられる。

また、注目すべきことは、俊子をはじめて中国に渡った目的について発言を
している。「中国に渡った個人的な目的は、上海で女性のための刊行物を創刊

(9) 大澤理子「“淪陥期”上海における日中文学の“交流”史試論一章克標と『現代日本小説選集』一
太平出版印刷公司・太平書局出版目録(単行本)」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第9号、
2006年4月、74頁

(10) 『中報』は汪偽政府が成立した日(1940年3月30日)に南京で周佛海より創刊された新聞で、
汪偽政権の主要な新聞である。(出典：南京市地方志編纂委員会編『南京報業志』上海：学林出版
社、2001年、62頁)

するためです」という俊子の発言は、彼女の中国での行動（特に晩年、上海での中国語婦人雑誌『女聲』の創刊と主宰）とは、確かに合致している。

しかし、この俊子の発言について気になるところもある。その話に入る前に、まず雑誌『女聲』が創刊されるまで俊子の中国での軌跡を見てみよう。

- a. 上海到着から周辺都市の1ヶ月の旅（1938年12月～1939年1月末）
- b. 北京に3年間滞在（1939年2月初め～1942年1月末。その中で1939年12月から上海への旅もあった）
- c. 南京滞在時期（1942年2月初め～同年3月18日）

d. 1942年3月19日に上海へ行き、同年5月15日上海で雑誌『女聲』を創刊「中国に渡った個人的な目的は、上海で女性のための刊行物を創刊するため」であれば、なぜ最初に1938年12月上海に着いた時、すなわちaの段階において、上海で女性のための刊行物を創刊せず、北京で3年間滞在した後なのか。そもそも当初、俊子はなぜ北京へ行ったのか。そしてなぜ北京を離れて直接上海へ行かず、南京に1ヶ月あまり滞在してから上海へ行ったのか。また、俊子が「上海で女性の刊行物を創刊する」のは何を目的としていたのか。これらの疑問が生じるが、これらについては別稿で論じる。

二、李蘊冰による座談会の議事録「本会举行大東亜解放婦女座談会書感」

座談会の書記である李蘊冰は、中国婦女慈儉学会の理事である。彼女によるこの座談会の議事録「本会举行大東亜解放婦女座談会書感」は、座談会の記録とその後の李蘊冰の感想という2つの部分から構成されている。

(1) 俊子の発言

座談会で、俊子は4回発言を行っている。以下でそれぞれの発言を見ていこう。

1回目

中国婦女慈儉学会の理事長萬孟婉が歓迎の挨拶をした後の俊子の答詞である。日訳は以下の通りである。

佐藤俊子先生曰く：貴国の歓迎に非常に感謝いたします。そして、女性作家のみなさまと会見し、ご教示を得て、感謝の限りです！貴国に来て4、5年が経ちました。まずは北京に3年間滞在しました。そこは貴国の古都で、文物古跡のすべてが悠久の歴史を持っていて、その偉大さを感じさせます。その後、上海に行きました。そこは太平洋西岸にあるもっとも大きな都会で、商工業が繁榮し、交通が便利で、気候が心地良いです。とても懐かしいです。今回は南京に来ました。南京は貴国の首都で、還都を経た後の建設で新しい雰囲気があり、生氣にあふれています。前途洋々です！中国に渡った個人的な目的は、上海で女性のための刊行物を創刊するためです。刊行物の内容も他の女性のための刊行物と同じです。従って、東亜の女性の知識と福利を増やすことを図ります。しかし、私は中国の女性を深く知らないので、機会を探して貴国の女性を訪ねたいと考えていました。この前、宣伝部の郭次長のご紹介を承り、萬校長にお目にかかりました。萬校長はとても誠意を込めて貴国の南京在住の有名な女性と女性作家を紹介していただきまして、会見ができました。多くのご教示を得て非常に感謝いたします。しかし、私が南京に来た目的は、4、5月の間に女性雑誌を出版したいためです。先生たちに多くのお助けやご指導、どうぞよろしくお願い申し上げます。(3～4頁)

まず、「貴国に来て4、5年が経ちました。まずは北京に3年間滞在しました。…その後、上海に行きました。今回は南京に来ました」についてである。

気になるところは、俊子が中国に来た年数である。実際、俊子が中国に渡ったのは1938年12月で、1942年3月の時点では、3年間3ヶ月しか経っていないが、俊子が言った「4、5年」は幾分誇張されている。

また、北京、上海、南京の滞在の順序についてであるが、前述したように俊子は、まず上海に到着、その後北京で3年間(滞在期間中、1939年12月から上海への旅あり)、続いて南京である。この俊子の発言である「まずは北京で3年間滞在しました。…その後、上海に行きました」は、正しくない。

もしかすると、「その後、上海に行きました」の部分は北京滞在中の1939年12月における上海への旅を指すのだろうか。

次に「南京は貴国の首都で、還都を経た後の建設で新しい雰囲気があり、生

気にあふれています。前途洋々です！」についてである。

ここの「還都」は汪偽政権の南京での成立（1940年3月30日）を指すと考えられる。「新しい雰囲気」「生氣にあふれ」「前途洋々」という言葉で俊子の汪偽政権への賛意が示されている。また、後の俊子の2回目の発言でも、汪精衛の妻である陳璧君への敬服の意が示されている。このような、汪偽政権や陳璧君への称賛の内容は今回の座談会での発言だけでなく、俊子のほかの文章にも見られる⁽¹¹⁾。よく知られているように汪偽政権や陳璧君は今の中国では非常に批判されている対象である。なぜ俊子が汪偽政権に傾いたのか。それは俊子の建前なのかそれとも本音なのか、興味深い問題であるが、ここでは論じない。

最後に、雑誌の創刊や俊子が中国に渡った目的、及び萬孟婉、中国婦女慈愼学会と接点を持ったきっかけについて、この俊子の発言からヒントを得ることができる。

2 回目

「劉石克司長」の俊子への質問に対する回答である。劉の質問は「佐藤先生は中国で女性雑誌を創刊するにあたって、中国の女性がどのようなことを望んでいるのかを知るべきだと思いますが、佐藤先生は中国で女性向けの雑誌を刊行する目的をどうお考えですか」（4頁）である。俊子の回答は以下の通りである。

佐藤先生曰く：中国女性に対する認識について、歴史上から見れば、中国女性は日本女性より進歩しているだけでなく、政治上の進歩はさらに迅速です。汪主席の夫人である陳璧君女士は政治的な女性の指導者で、重要な地位を占め、政治の面において、建設（貢献）が多く、敬服いたしています！これは褒め言葉ではなく、確かに事実なのです。中国女性は日本女性より進歩しているだけでなく、社会的にも、日本女性よりかなり自由で

(11) 例えば、①「汪精衛氏と洪秀全を語る」（『改造』、1940年2月1日）、②「南京の感情」（『改造』、1940年5月1日）、③「汪精衛氏への贈物」（『読売新聞』1940年5月28日、29日、31日）であるが、これらのテキストは『田村俊子全集第9巻』に収録されている。

また、佐藤俊子の中国語文章「陳璧君女士印象記」（『華文大阪毎日』第4巻第8期、1940年4月15日）にもそのような内容がある。

す。でも、家庭の責任から言えば、日本女性に及びません。(4頁)

俊子は、中国女性と日本女性におけるそれぞれ認識の進歩、政治上の進歩の迅速さ、社会的な自由、家庭の責任といった状況について考えながら答えた。こうした考えは俊子を書いたほかの日本語や中国語の文章⁽¹²⁾にも見られる。

3 回目

「劉石克司長」が発言した「先生（筆者注：佐藤俊子を指す）は中国女性の政治活動がかなり進歩しているとお考えになりますが、ドイツでは女性は家に帰せよと提唱する傾向にあります」という内容についての俊子の意見である。

俊子の主張をまとめると、女性は「政治活動も家庭の責任もどちらも放棄すべきではな」く、「家政に関する常識が必要」であるが、「政治上の知識もなければならぬ」ということである。

4 回目

中国女性の参政権獲得、男女平等についての話である。

俊子は「中国女性は確かに参政権を得るべき」こと、「我々東亜の女性は平等に達し、将来の進歩を図る為に、我々は手を携えて大いに働き、同じ戦線を歩むべき」ということを主張した。

(2) 記録後の李蘊冰の感想の内容

李蘊冰は、ドイツの「三K」（「Kinder(子供) Küche(厨房) Kirche(教堂)」）主義政策を視野に入れ、当時の中国で起こった、女性は家に帰れという主張のなかで、「女性はどうすればいいか」という問題について、以下の6点の心構えを提示した。

- 〈1〉 知識向上、知識が高くなれば能力も高くなる。能力は男性と平等であれば、自然に待遇も平等になる。
- 〈2〉 随時に進学のを機会を捉え、時代遅れの人とならない。

(12) 日本語文章：佐藤俊子「婦人の歩む民族協和の道」『婦人公論』1939年6月1日（『田村俊子全集第9巻』、584～587頁）

中国語文章：佐藤俊子「就中日婦女提携而言」『新光雜誌』第1巻第7期、1940年10月10日

- 〈3〉心身を鍛え、気力が充実し、内外の両方面に対応できるようになる。
- 〈4〉道徳修養と仕事の効果について、随時に自己点検し、天を支えて大地に立ち、「人に口実を与え」たり侮蔑させる機会を与えない。
- 〈5〉強い信念を持ち、女性が昇進できるように一切の障害物を打ち破り、事実をもって新女性の能力を示す。
- 〈6〉知識が浅薄な一般の女性、及びのちに騙されて岐路に陥った女性を連携して救済し、どちらも同じように解放する。

おわりに

本稿は俊子と中国婦女慈愼学会の座談会（1942年3月18日）に関する資料①②の内容、特に②に記載されている俊子の発言（4回分）を紹介した。その中で、主に雑誌『女聲』が創刊される約2ヶ月間前の俊子の1942年の南京滞在時期と行動を確認し、南京滞在時期における俊子の人的ネットワークを検討した。

この人的ネットワーク、特に中国婦女慈愼学会のメンバーから、のちに俊子が創刊した雑誌『女聲』への寄稿も見られる。その寄稿者や寄稿内容などの検討は今後の課題とする。

付録

表3:出席者と関係者（田村俊子と中国婦女慈愼学会の座談会、1942年3月18日）

座談会の出席者				
組織名	職位	名前	基本情報	出典
「中国婦女慈愼学会」	理事長	孟孟婉	(1940年12月時点) 年齢33、本籍：雲南、日本早稲田文学部大学院卒業、宣伝部編集審議	中華全国婦女連合会婦女研究所 / 中国第二歴史档案館編『中国婦女運動歴史資料 民国政府卷 1912~1949 下』北京：中国婦女出版社、2011年、1005頁
	理事、本座談会の書記	李蘊冰	(1940年12月時点) 年齢36、本籍：広東中山、北京女師大卒業、考試院銓叙部科長	
	理事	譚其覚	(1940年12月時点) 年齢40、浙江、国立北平女子高等師範卒業、交通部專員	

	監事	劉叔度	(1940年12月時点)年齢36、北平、国立北平女師大文科卒業、国立中央図書館主任	
		王英	(1940年12月時点)年齢28、河南、明德女子中学卒業、南京新報記者	
	「本会の全体理監事」	理監事：合計20人。 理事：13人（喻毓秀、萬孟婉、譚其覺、蔣果儒、齊家、鈕倫、田昭、王竹虛、周端伯、岳繼先、王琳卿、董乃貞） 監事：7人（王英、潘錦、花貞彬、戴肖梅、蔣秀琴、李国琳、劉叔度）		
「女性運動の先輩」	女性作家名流	嚴清穆	嚴清穆、如何心、蔣果行、顏潔、金問蘭についての情報がなかなか見当たらない。	
		如何心		
		蔣果行		
		顏潔		
		金問蘭		
汪偽政権の宣伝部	「楊司長」	楊鴻烈		
	「劉司長」	劉石克		
教育部	「邵鳴九主任」	邵鳴九		
座談会についての関係者				
「中日文化協会」			1940年7月28日に南京で成立した、「国民政府主席代理汪精衛と中華民国派遣特命全權大使阿部真行」をはじめ、「大東亜新秩序一日提携、善隣友好、共同防共の三原則を基調として」日本大使館や興亜院の要人といった「日本政府の強い後ろ盾を背景とした機関」である。	杉野元子「南京中日文化協会と張資平」『藝文研究』第87巻（岡晴夫教授退任記念論文集）2004年12月、257～258頁
汪偽政権の宣伝部	「郭次長」	郭秀峰	俊子を萬孟婉に紹介した者。 「九州大学卒の広東人」で、「政府宣伝部の指導司（四司の一つ）司長を経て宣伝部次長となり、中華日報館の社長も兼任していた人物である」。	資料②の3頁 大澤理子「“淪陷期”上海における日中文学の“交流”史試論一章克標と『現代日本小説選集』一太平出版印刷公司・太平書局出版目録（単行本）」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第9号、2006年4月、74頁